

砂あそびの構造 —— 出会いの種々相 ——

小 川 清 実 (埼玉純真女子短大)

1 はじめに

子どもが砂と関わっている姿は、日常的に非常によく見られるものである。「砂」そのものの持つ性質が子どもに十分に満足を与えるものであることは、すでに知られている。

私は、これまで様々な幼稚園で、子どもたちが砂と関わっている様子を数多く観察してきた。砂の持っているその時々素材の性質によって、子どもたちは様々な活動をしていく。砂は、水が加えられることによって、固まりにもなり、多量の水が加われば、流れ出す。子どもたちは活動の瞬間一瞬で、砂の変化に驚き、喜び、次の活動の基点としていく。

砂に関わるひとつひとつの遊びは、それぞれに意味があると考えられる。年齢的な発達段階には無関係に活動が展開される。たとえば、砂の「おだんご」作りを考えてみよう。「おだんご」作りは、幼稚園に入園したばかりの3歳児から、すぐにできる活動である。そしてまた、5歳児の、卒園直前になった頃にもやはり「おだんご」作りはやられる。この二つの活動は、「おだんご」作りということと整理してしまえば、同じ活動である。しかし、各々の内容を考察すると、活動の意味が異なっていることがわかる。すなわち、砂が子どもにとって、意味ある体験になる素材のひとつであると考えられる。

私は、砂に関わる子どもの遊びの事例を収集し、分類していく過程において、種々の出会いと体験の意味を見出すことを試みた。まず、子どもが砂と関わる際の出会いには二通りあることに気づいた。その一つには、「始源的出会い」と名づけたものであり、もうひとつは「意図的出会い」と名づけたものである。各々の出会いについて、次に説明していきたい。

2 「始源的出会い」と「意図的出会い」

「始源的出会い」とは、「さわる」「こねる」活動を主体とするものであり、この活動だけで、子どもの遊びが終始するものである。「さわる」「こねる」活動それ自体で、子どもに満足を与えるものである。また、「意図的出会い」とは、「集める」「掘る」「積み上げる」「拡散する」という4つの座標軸を基本とする球体のなかに様々な活動が含まれる。私は、子ども

もの砂に関わる活動を次のように図示することを試みた。(図1:砂あそびの活動図)

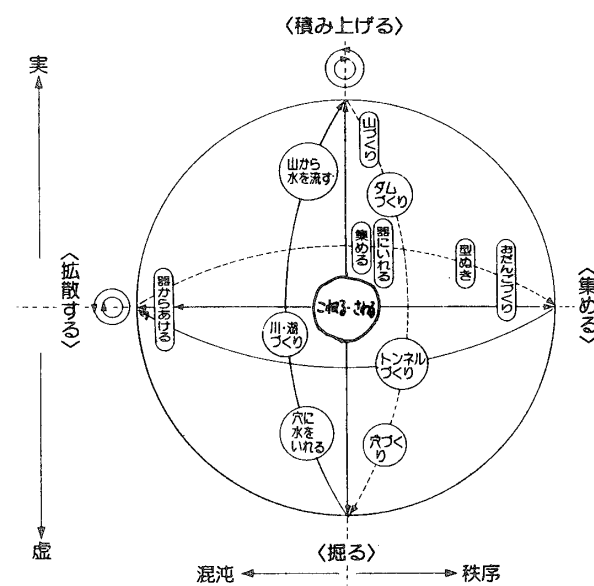
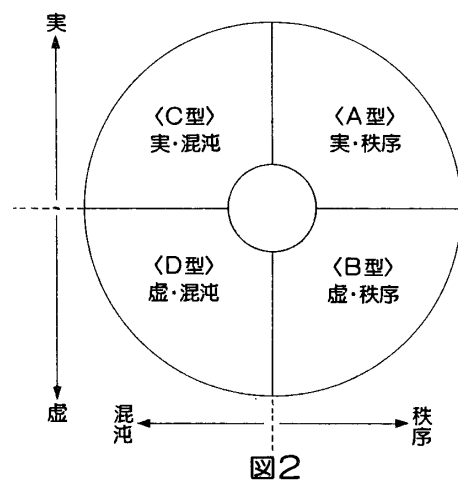


図1:砂あそびの活動図

図に示すように、二本の軸を中心として、この軸がくるくると回転する。これは、相対する活動に向かって動くことを意味している。すなわち、子どもの活動は常に変化していることを示しているのである。主軸となる二本の軸の中心には、この球体の核をなす、「始源的出会い」である「さわる」「こねる」活動が位置している。「集める」活動から「拡散する」活動へ、あるいは「拡散する」活動から「集める」活動へと、または「掘る」活動から「積み上げる」活動へ、あるいは「積み上げる」活動から「掘る」活動へと、子どもの活動は目まぐるしく変化する。

さらに私は、図に相対する概念を取り入れた。こうすることによって、子どもの活動のひとつひとつが、どのような階層に位置しているかが明らかになった。図示すると、次ページのようになる。(図2)

右上に位置している<A型>—(実・秩序)—には、砂で形をつくる活動(例「山づくり」「おだんご作り」)が含まれている。また右下に位置している<B型>—(虚・秩序)—には、砂を空っぽの状態にしていく活動(例「トンネルづくり」「穴づくり」)が含まれる。



さらに左上に位置している〈C型〉—(実・混沌)には、砂という実体を扱うときに、拡散へと移行する活動(例「山から水を流す」「砂を器からあける」)が含まれる。そして左下に位置している〈D型〉—(虚・混沌)には、砂がない状態、すなわち虚の状態にあるところから、拡散へと移行する活動(例「川・湖づくり」「穴に水をいれる」)が含まれる。図の左側では、木が重大な役割を果たしていることが興味深い。すなわち「掘る」—「積み上げる」という縦軸は「量」のイメージで、また「拡散」—「集める」という横軸は、「形体(フォルム)」のイメージで構成されているのである。

以下に種々の出会いをもたらし活動の具体的な事例を見ていくことにする。なお、事例の多くは、昭和53年度お茶の水女子大学家政学部児童学科における現職教育研究会に参加した幼稚園での観察記録である。

(1)「始源的出会い」

① 立わる

② こねる

これらの活動は、何かをつくるというような意図を持たないものである。何かをつくるという意図はないが、これらの活動は、砂の特性を知る点においては大変意味深い。乾いた砂の感触、少し水分を含んだ砂の感触、そしてたくさん水分を含んだ砂の感触など、その時々、砂の状態の感触を子どもたちは実際に手で触れたり、足で触れたりして知っていくのである。

(2)「意図的出会い」

「始源的出会い」との違いは、意図的に砂に関わっているかどうかという点である。山をつくらしたり、山にトンネルを掘ったりするような活動には、子どもた

ちのより強い意図がはたらいていると考えられる。

① A型(〈積み上げる〉—〈集める〉同型)

A₁型

- ・砂を集める
- ・集めた砂を容器にいれる
- ・集めた砂を容器にいれ、また別の容器にいれ返す
- ・集めた砂を容器にいれ、いくつも並べる
- ・型ぬきする
- ・固める(おだんご作り)

A₂型

- ・山づくり
- ・ダムづくり

② B型(〈集める〉—〈掘る〉同型)

- ・穴づくり
- ・トンネルづくり

これは、「虚」のフォルムをつくる活動である。

③ C型(〈積み上げる〉—〈拡散する〉同型)

- ・山から水を流す

この活動は、量的に〈積み上げる〉イメージが、少しずつ破壊され、量的に少なくなっていく、もとの状態にもどることを示している。

④ D型(〈掘る〉—〈拡散する〉同型)

- ・穴に水をいれる
- ・川・湖づくり

これは、穴や池など、凹んだ部分に水を注ぐことが主な活動である。水の量が潰すに従い、〈拡散〉の方向に向かう。すなわち、凹みは砂で埋まり、もとの状態にもどるのである。

3 おわりに

子どもが砂に関わる出会いの種々相を考察してきた。ここでは、種々の事例に共通の特徴を述べる。まず第1にはくり返しの多いこと、第2には比較的に子ども同士の会話がないことである。

第1点については、図1に示したように二本の軸が交叉して回転する部分を行ったり来たりしている、すなわちくり返しているといえる。これは、まさに混沌と秩序のくり返しに他ならない。

第2点については、子どもが他の子どもとコミュニケーションするよりも、砂そのものとコミュニケーションすること満ち足りていからだろうと考えられる。砂との関わりが深くなればなるほど、子どもは砂と対話をするようになっていくのである。

今後とも砂に関わる子どもの活動について注目し続け、研究を深めたい。